

医院だより

令和6年2月(247)

秋山医院

藤岡市小林748-8

☎0274-22-8315

二月 別名 如月(きぎらぎ)、建卯月(けん

ぼうげつ)、仲春(ちゆうしゅん)

如月は、衣更着とも書きます。暖かくなり脱いだ着物を寒の戻りでもう一度着込むからと言われます。紀元前2世紀ごろ、中国最古の辞書と言われている『爾雅(じが)』に「二月を如となす」と記載されていたことによるとされています。古く中国では2月を「如」と表していました。



「如」は本来「従う・赴く」という意味があります。そこから、草花や木などの自然や動物が春に向かって動き出す月、という意味合いで「如」をあてたときられています。(ギフトマナー辞典より)

二月は二十四節気の立春、雨水を経て春の始まりへと向かう月です。(河出書房新社、鈴木光弘著「暮らしに生かす旧暦ノート」より)

目次

- 1 二月の異称、二月の花、二月の言葉
- 2 二月の暦
- 3 お知らせ、当番医、健康テレフォン
日野原重明先生の言葉
- 4 大岡 信選集
- 5 けんこう(百七十)
群馬県感染症発生動向調査より
院長のひとりごと(二一六)高山飛脚閉店

「二月の花」

水仙・梅を挙げます。

『二月の言葉』

ああ、わたしは災いだ。わが母よ、どうして私を産んだのか。国中で私は争いの絶えぬ男、いさかいの絶えぬ男とされている。わたしはだれの債権者になったか

とも、だれの債務者になったこともないのに、だれもが私を呪う。主よ私は敵対する者のためにも、幸いを願ひ、彼らに災いや苦しみの襲うとき、あなたに執り成しをしたではありませんか。

(エレミヤ書第十五章一〇―一節)

私はかつてエレミヤと共に歎いて言った、ああ、私は禍いである、人は皆私と争い、私を攻め、皆私を詛(のろ)うと。けれども今になって私は感謝して言う。ああ私は幸いである、人は皆私と争い、私を攻め、私を詛つたので私は神に結ばれてその救済にあずかることができた。人に捨てられるのは神に拾われることであつた。人に憎まれるのは神に愛されることであつた。人に絶たれるのは神に結ばれることであつた。今に至つて思う、私の生涯にあつたことで最も幸福であつたことは世に侮られ、嫌われ、辱められ、斥(しりぞ)けられたことであつたということ。

(内村鑑三「一日一生」二月十七日)

「二月の暦」

一日 テレビ放送開始(1953年)

三日 節分 春夏秋冬の季節の分かれ目を「節分」と言つた。節分があり立春、立

夏、立秋、立冬があるが、農耕生活では一年中の生活設計を始める日として立春が一番有名になった。

四日 立春 立春とは初めて春の兆しが表

れてくるころのこと。この季節から数えて最初に吹く南寄りの強い風が春一番です

初候

東風凍を解く(とうふう(こ)おりをとく)

暖かい風が吹いて川や湖の水が溶けだすころ。旧暦の七十二候では、この季節から新年が始まります。

(新暦では、およそ二月四日～八日ころ)

次候

黄鶯睨腕(うぐいすなく)

春の到来を告げる鶯が、美しい鳴き声を響かせるころ。かつて(貞享暦)は梅の咲く季節「梅花乃芳し(うめのはなかなばし)」とも呼ばれていました。

(新暦ではおよそ二月九日ころ～十三日ころ)

末候

魚氷に上る(うお(こ)おりにあがる)

暖かくなって湖の水が割れ、魚が跳ね上がるころ。そんな春先の薄く張った

氷のことを、薄氷(うすらい)と呼んでいます。

(新暦では、およそ二月十四日～十八日ころ)

七日 北方領土の日

十一日 建国記念の日「建国記念日」とは言わず、「建国記念の日」とすることで、日本の建国をお祝いする日となりました

十二日 振替休日

十四日 バレンタインデー

十六日 日蓮上人誕生会

十七日 安吾忌

十八日 利休忌、アレルギー週間

十九日 雨水 降る雪が雨へと変わり、

氷が溶けだすころのこと。農耕の準備を始める目安とされてきた。

初候

土脈潤い起(とみやくうるおいおこる)

早春の暖かな雨が降り注ぎ大地がうるおいめざめるころ。古くは「獺(かわうそ)魚(うお)を祭る」という不思議な季節とされてきました。

(新暦ではおよそ二月十九日～二十三日ころ)

次候

霞始めて黴(たなび)く

春霞がたなびき、山野の情景に趣が加わるころ。遠くかすかな眺めが、ほの

かに現われては消えるうつろいの季節。(新暦ではおよそ二月二十四日～二十八日ごろ)

末候 草木萌え動く(そうもくもえうごく)

しだいにやわらぐ陽光の下、草木が芽吹き出すころ。冬の間に蓄えていた生命の息吹が外へ現われはじめる季節。

新暦では、およそ三月一日～四日ごろ

二十三日 天皇誕生日

お知らせ

一、マイナンバーカードでの受付ができます。保険証の代わりになります。将来的には他院での処方や特定検診結果もここから知ることができず。

またマイナンバーカードがない方は、月の最初の受診時には、受付に保険証を提示してください。

二、診療案内

- 一般外来診療・往診・在宅医療
 - 骨粗鬆症の検査・治療
 - ピロリ菌の検査と治療
 - CT、MRI、PETの予約
 - 胃カメラ・大腸カメラ
 - 肺炎球菌・带状疱疹ワクチン
- 三、当番医 三月十七日・五月五日(日)

9時から18時まで



四、群馬県保険医協会二十四時間健康テレホン

電話〇二七―三三四―四九七〇

<http://www.rajin.com/kenko/>

月	つき指の対処法
火	上手な歯磨き剤の使い方
水	大腸癌
木	ブリッジのお手入れ法
金	噛むと歯が痛い
土日	かかりつけ医いますか？

日野原重明先生の「遺したかった言葉」

「若い人と話が合いません。若者たちとどうつきあっているのがいいのでしょうか？」

僕は、若い人が大好きです。

誰かに褒めてもらえるなら、若い人に褒めてもらいたい。

若い人に「頑張っているあなたの姿を見て、私達ももっと頑張りたいと思います」とか「あなたがこんな風にしてくれたおかげで、いま私達はこれほど幸せです」と言われた時、本当に喜びを感じるし、もっともっと若い人たちの勇気づけられるような人生の先輩でありたいと思うのです。

実際に80歳以上離れた人たちとも交流させてもらって、いろいろな刺激や学びを頂いています。意外と若い人のほうも、僕のような世代の話を知りたい、教えてほしいと思ってくれているものなのです。



若い人と付き合うときに、僕が気をつけているのは、人と人が触れ合う時のタッチの仕方です。言葉遣いや表情態度、そう言いたいいろいろなものを総称し「タッチ」という感覚を持っているのですが、それがよそよそしい、とげとげしいものになると当然若い人との関係がぎくしゃくしてきます。

そうではなく、(略)「あなたの良さを私はもつと感じたいんですよ」という気持ちを相手へのタッチに込めることで、自然といい関係を作っているのではないかと考えています。

「近頃の若い者はなっていない」というのはいつの時代も言われることですが、これは非常に自己中心的な発想のように思います。そうではなく、年を取った僕たちの方が経験があるので、若く、若い人に歩み寄っていくべきでしょう。若い頃は照れてしまったり、言葉が見つからなくてうまく言えなかったようなことも、年を取ったからこそ言えるようになるという年の功も大いにあると思います。

あともう一つ大切なのは、自分より若いもの、親しい家族、また弱い立場の者に対して、僕たちは相手を敬う気持ちをもすれば欠いてしまいがちであるということです。目上の人や年配者を敬うだけではいけません。

(略)

僕の尊敬する医師ウイリアム・オスラーは、白血病の少女の病室へ行く際に、病院の庭に咲いていた薔薇を切って持っていったそうです。私はあなたのことを思っている、という気持ちを薔薇の花に託したのですね。

花を受け取った少女にとってオスラー氏は病院にいたただの老人のお医者さんから、自分を思っている一人の素敵なオスラー医師という存在になったろうと思います。こんな風に、年齢の差を超えて人の心と心が交流できるというのは本当に素晴らしいと思います。

日野原重明「生きていくあなたへ」

庚申山の坂道



大岡 信著『新折々のうた』六から

たゞかひに果てにし子ゆゑ、身に染みて

ことしの桜 あはれ 散りゆく 釈 超空

『倭をぐな』(昭三〇)所収。釈 超空(本名折口 信夫)は国学院大学教授だった。昭和一九年、愛弟子の一人春洋(はるみ)を養嗣子とした。春洋は召集され、戦地にあった。そして彼は戦局とみに激化した翌二十年、硫黄島での米軍との死闘であえなく戦死し、超空を慟哭させた。上記最終歌集にはこの悲痛な体験を含め、戦後社会への憤りが色濃く流れている。桜の散るのを眺めるのさえ、春洋の哀れさが身に染みだ。

あすか川ふちにもあらぬわが宿もせにかわりゆく
ものにぞありける 伊 勢

「古今集」卷十八雑歌下。「家を売ってよめる」とめざらしい題のある平安朝和歌。作者がまた宇多天皇に寵愛された一流歌人女性だから、珍しきは一層である。有名な古歌「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬になる」を踏まえるが、言葉遊びの技巧もある。「わが家は飛鳥川の淵でもないのに(瀬に)銭に)変わっていくのね」。住み

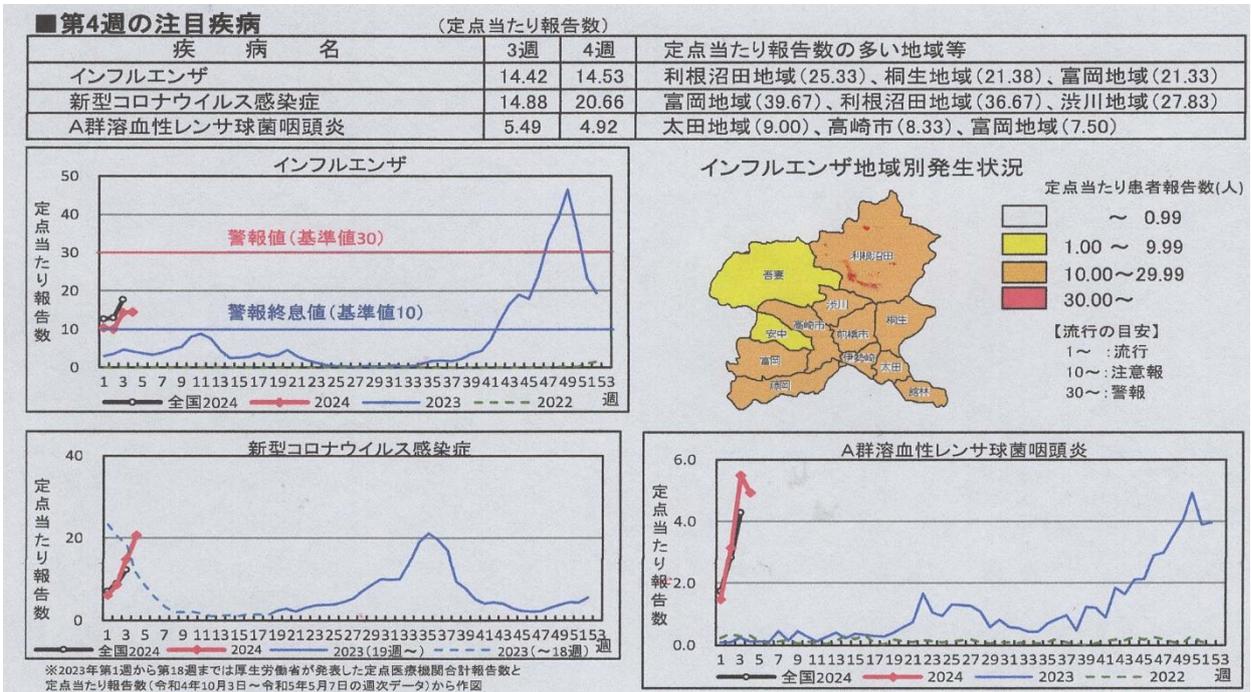
5 慣れた家を人に譲る重い感慨、冗談にでもまぎらすしかなかったか。

けんこう (百七十)

群馬県感染症発生動向調査より(4週)

(群馬県衛生環境研究所感染制御センター)

- (1) インフルエンザの報告が継続しており、県内では警報が発令中です。引き続き、こまめな手洗いや周りの感染を拡げないよう、咳やくしゃみが出るときはマスクを着用するなど咳エチケットを行いましう。
- (2) 県内の高齢者施設において、インフルエンザの集団感染があり、入所者が複数名亡くなった事例がありました。
- (3) A群溶血性連鎖球菌咽頭炎が一部の地域で多く報告されています。咳やくしゃみのしぶきに含まれる菌を吸い込んだり汚染された手で、口や鼻を触ることにより感染します。石鹸と流水を使った手洗いを行いましう。



院長のひとりごと(二一六)

(これまでのあらすじ)

◇令和二年2月の春、まだコロナ禍盛んだった頃のこと。

総合病院で長く胃炎だけがかかっておられた百一歳の女性(Tさん)をこれからは高山まで往診して見てほしいと訪問看護を通じて依頼があった。

◆当時、やはり高齢のご夫妻を藤岡市内で往診していたが、その奥さんの方(Jさん)のご実家は偶然にもTさんのお家の近くの家であった。働き者であったこと、嫁ぐ前にお兄さんを戦争で亡くし、義姉さんはご主人の従弟と再婚され家を継いでくれたという。

Tさんも、息子さん(Mさん)が生まれた後、ご主人が戦死し、やはりご主人の従弟と再婚して家をつないだという同じような悲劇を乗り越えてこられた方であった。

◇Jさん、Tさんとも70年、80年隔てた後に消息を知り合うことは懐かしさう、貴重であらうと、私は一人ぎめして、往診がてら、お二人のご消息の配達を胸に収め、頼まれもしない飛脚の役割を引き受けていたという次第でした。

◆令和五年 「続 高山飛脚」では 藤岡に嫁がれた**Jさん**が令和五年2月に亡くなられたことを記しました。このところの変化と言えば、世界遺産「高山社」の母屋兼蚕室が7か年計画復元工事が始まり、今は母屋の建物はすべて取り払われ、地面が出ています。今でなくては今後数十年間は見られない貴重なものがたくさんあります。

「高山飛脚 閉店」(あらすじと一部重複します)
令和二年2月の春、まだコロナ禍盛んだった頃のこと。

総合病院で胃炎だけでわざわざ高山から長く受診に通っておられていた百一歳の女性(**Tさん**)をこれからは高山まで往診して見てほしいという依頼が訪問看護を通じてありました。

それにつき、注文が一つ付いていた。注射が恐いので、採血はしないで見てほしいと・・・。

更に驚くことが三つ、一つは視力障害、今は全盲で何も見えないということ、あとの二つは、所が高山地区とやや遠隔地であること、そして極め付きが、百一歳の**ご高齢**だということである。

『どんなお話を話題にしたらよいか?』

『絶対に、コロナを持ち込んでほならないこと』
これが何よりまして最重要課題。

◆玄関で感染予防のガウン、マスク、ゴーグル、帽子、手袋をつけて、部屋に案内された。小柄な方で、ベッドの上に座って待っていてくださった。
櫓(やぐら)を持つ屋根



1919年(大正8年)のお生まれはまぎにスペイン風邪の始まった年で、**Tさん**は100年前のパンデーミックと今回のそれとで一生に2つのパンデーミックを経験されたことになります。しかし最初の時に罹患されただけ

で、その後は1回も風邪を引いたことがないとのこと。

◇私の母より10年若い方で、母と話しているような懐かしい気持ちでお話しできました。「寝ているばかりで、手足が動かなくなっちゃったかどうか」と心配されておられたので、「休む時と起きた時に両手両足を左右交互に10回、20回と握ったり開いたりしていると調子が良くなりますよ」と私がお話しすると、その後ずっと布団の中で手足の運動をやってくださったようので往診で少しでも話の間が出ると、「言われたように毎日手足を動かして調子がいいですよ」と報告してくださったものである。

◆嫁いで来られた時は、ハイヤーで「ごまでやってこられたといいます。私は「お馬」か「人力車」でお嫁入りかと思っていたのですが、ずっと豪華でハイカラなお輿入れだったのでね。(これは私の時代錯誤でした)

しかし「ご長男の**Mさん**が生まれていくらしらないで、ご主人が戦死され、ご主人の従弟の方と再婚して婚家にとどまられ、二女をもうけられたとのことでした。

私が往診を始めたころは「ご長男の**Mさん**とお二人で暮らしておられ、他に嫁がれた娘さんお二人が交替でお世話に来ておられました。

◇当時藤岡市内にも90歳台のご夫婦お二人を一緒に往診しておりましたので先にご夫妻の診察を終えてから高山に向かうようにしておりました。

◆夏の暑い、ある日のこと。この日もまた藤岡市内のお二人の往診を先に行きました。一つの部屋にベッドが二つ置いてあり、息子さんがベッドの間を飛び回ってお二人の面倒をみておられました。

たまたま奥さん、**Jさん**のほうに
「私はこの後、高山まで往診に行くんですよ」
と

とお話すると、
「えーっ、私は高山の出身なんですよ」と、言われた。これはめずらしいとおどろいたら、なんと私が往診している家の家族の話になったのです。

「**Tさん**元気かな、もう百歳にはなっていると思えますがねえ」

「ああ、**Tさん**ですね、実は私はそこに行っているんですよ、ええ、もう百二歳になりますよ」

Tさんはその地域では誰も知っている有名な人でした。

◇喜んでいただける土産話を携えて、往診に向かう道々は、心が弾むものである。

Tさんもその息子の**Mさん**も藤岡に嫁がれた**Jさん**のことをよく覚えておられ、お兄さんがやはり戦争で亡くなられ、残された奥さんは、夫の従弟と夫婦になり家を継がれたとのこと。 **Tさん**にとってはご自分と似た人生を歩いている人が近くいることは気になる存在であったに違いありません。

◆七月末の暑い日、市内の**Jさん**を往診で訪れ、まずご主人を診察の後、奥さんを診察しました。

『しかし**Jさん**、今日はまた特別に暑いですねえ。』

「そうですね、暑いですねー」

『これから高山に行くのですが、どうか、一緒に高山まで行ってみませんか？あちらの方が少しは涼しいでしょうから…』

と、話しかけましたら、お母さんと一緒に息子さんも大笑い。離れたところで聞いておられたご主人は笑い声に気づかれたが話の内容までは分からなかったようので、

「どうした、何事だ」

と息子さんに説明を急ぎ立てた。

(いやなに、奥さんをちよつと高山まで誘拐してはいかがかと相談していたところなんですよ)

◇**Tさん**にも、**Jさん**にも、お二人にとって道路の便不便、「高山社」の世界遺産登録の有無にかかわらず、大戦でこんな狭い谷間で育った多くの若者が命を落とし、その一人一人の周りにも大きな悲しみの渦が巻いたことをわすれてはならないということが、彼らが命を賭して後世に伝えたかった高山の最大遺産であると思えます。

◆私は、当分両方(かた)に喜んでいただける話題を小包みにして、足の軽い飛脚になって往復することにいたしましたよ
う・・・(と考えておりました)。

◇令和4年2月、藤岡に嫁がれた働き者の**Jさん**が亡くなられました。

令和5年5月、**Tさん**の息子の**Mさん**が

お母さんを残し、急死されました

十月三十一日、**Tさん**の不調に訪問看護

の担当が気づき、診断の2週間後、

十一月十三日、百四歳で亡くなられてしまいました。

予後が短いためその期間に痛みだけは取ってあげたいと訪問し、鎮痛剤の量を加減していました。痛みが軽度の時は痛みをまぎらわそうとして

か、いつも唱われていた童謡を両手で拍子をとりながら一生懸命歌っておられたとのことでした。

◆「痛い」「泣きたい」「困った」という初めて見せた動揺の悲鳴を聞いて、急いで鎮痛剤を追加しました。

これで楽になり休まれたと後で聞きました。本当に苦しませずに済んでよかったです、と心から思いました。

◇お二人の娘さんに

「もういいよ、ありがとう」と言い残し、また訪問看護や医療者にも

「ありがとうと伝えて・・・」

と言いつづされたことを後で伺い、気持ちが救われた気がいたしました。

◆私は、日野原重明先生が、

105歳で亡くなられ、その半年前まで働いておられたことと、**Tさん**があと2か月で日野原先生と同じ105歳になるのだったなあ、このところ考えることしきりでした。そしてさらに日野原先生が『若い人の死ほど苦しい』

『高齢になるほど死は楽になる』

と書かれていたのを読んだことがありますが、**Tさん**は異常が見つかり（自覚症状はなかった）その後2週間で亡くなられたことも、先生のお言葉通りであったと感慨深いものがありました。

◇そして、十二月二十三日、藤岡市の**Jさん**のご主人が亡くなられました。最後まで、周囲を笑わせてくれる方でしたが、息子さんによると、駆けつけた看護師が手当てしているときも、「草津節」の一節で声をかけると、「チョイナチョイナ」と答えて笑わせていたと、息子さんは涙ながらに教えてくれました。

◆私には一つの疑問がありました。

Jさんの死についてご主人は一言もそれに関することは言わなかったといいますが、わかっていたのでしょうか？もしや帰ってきているのではと思われてか、ご自分の診察中、2m離れた**Jさんのベッド**の方を見やるのがたびたびありました。そう言えばご主人の診察中はいつも容態を気にして**Jさん**がご主人の

方を見つめていたり、大丈夫かどうかと声をしきりにかけておられたのでした。

◇**Tさん**は息子さん**Mさん**の急逝について知っておられたのでしょうか？

まわりからは知らされず、**Mさん**の不在と周囲の沈黙により、自分をいたわるために皆が大事なことを口にしないのだとすべてわかっていただけたと思います。

◇臨終のときに 私たち医療者にも

『お礼を申し上げます』

という遺された方です。おられれば一番**Mさん**にお礼が言いたかったことでしょう。

◆藤岡から世界遺産のある高山まで1週に1回の往診は、私には生まれ故郷に帰る時のような気持ちが出て、心が洗われる三年間でありました。

◇偶然にも高山に住まわれている**Tさん**のお家と藤岡の**Jさん**の生まれ故郷が、高山では目と鼻の先だったことで訪問診療がきっかけになり、戦死されたご家族の辛くも懐かしい記憶をよみがえらせたに違いありません。

◇ご高齢の方たちに囲まれて若者ぶって
いた私、実は足弱の飛脚も、お預か
りした想い出を背負ってお二人の間
をなんども往復してまいりました
が、もう体力・年貢の納め時で、飛
脚稼業を返上しなくてはならぬ時期
が来ているな、と感じます。

．．．
なにせ、楽しく懐かしい手紙を預けて
くれる人も、喜んで読んでくれる受
取人もおらなくなってしまういた
がゆえ．．．

蠟梅(高山)



竹沼の猫